

医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪



独居高齢者の見守りシステムが、人と人をつなぎ、地域の活力を高める

2015年4月取材

千葉県松戸市
医療法人社団緑星会 どうたれ内科診療所 院長

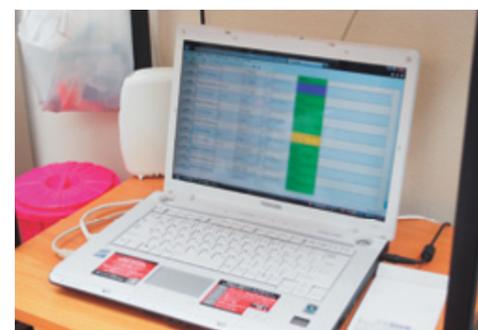
堂垂 伸治 先生

1999年、どうたれ内科診療所を開設した堂垂伸治先生は、地域医療実践の場と決めた松戸市を、「認知症になっても、がんになっても、寝たきりになっても、1人暮らしになっても、安心して過ごせる街」にするべく、独自の地域活動を推進しています。

1人暮らしの孤独感を癒やす声かけシステム

週に1度、1人暮らしをしている高齢の患者さん宅の電話が鳴ります。電話に出ると、聞こえてくるのは耳慣れた堂垂先生の声。「もしもし、どうたれ内科診療所の堂垂です。お元気ですか?」。実はこれ、録音された音声で、患者さんが希望した曜日・時刻に自動的に電話がかかる仕組みになっています。患者さんは、問題がなければ電話の『※1』を、体調不良なら『※2』を、要連絡の場合は『※3』を押し、録音メッセージの問いかけに答えます。応答結果は同診療所のパソコンに一覧表示されるので、多数の患者さんの安否や健康状態が一目で確認できます。これが、堂垂先生が2007年から工学院大学・管村研究室と共同開発した高齢者見守りシステム“1人暮らしあんしん電話(以下、あんしん電話)”です。

「孤独感を募らせている方々に、音声録音という形であっても声かけをし、『あなたのことを心配している人がいますよ』と伝える意義は大きいと思います」と堂垂先生。体調不良や要連絡の場合は、同診療所のスタッフが電話をかけ、相談に応じたり、医学的な対処につなげて病状悪化を防いでいます。



“あんしん電話”の応答結果一覧画面。問題なしは緑、体調不良は黄、要連絡は赤、応答なしは青で表示されます。応答なしの場合、自動的に翌日も電話をかける設定になっています。

地域住民と協働し、独居高齢者の異変に対応



常盤平団地の高齢化率は約4割。“あんしん電話”に2日続けて応答がなければ、同診療所から自治会に連絡が入り、ボランティアが高齢者宅に駆け付けます。

現在、同診療所では、患者さん約70名と、常盤平団地など3地域の住民約110名を対象に、“あんしん電話”を稼働させています。また、松戸市内の他の5つの診療所、1つの社会福祉法人でも同システムを運用している他、大阪や北海道など県外へも利用が広がっています。全国の総対象者は800名を超えました。

2015年3月、松戸市は同システムに助成金を出すことを決定。市の後ろ盾を得て、普及の加速が期待されます。堂垂先生は、“あんしん電話”により、「地域の人と人とのつながりが生まれます」と話します。「電話に応答がない場合は、地域のボランティアや自治会などに連絡し、高齢者宅を訪ねてもらっています。それを機に、『語り合い助け合う人間関係』が始まるわけです」。安否確認のツールには、他にも緊急通報装置がありますし、今後は時計型端末なども利用されるようになるでしょう。しかし、「そうした『安否の結果だけを求める』ツールと、地域で人が動き、つながることを促す“あんしん電話”は、決定的に違います」と堂垂先生は断言します。

紆余曲折の人生を歩んだ後、医師となる

社会改革を希求した東大闘争に、同大学の学生として関わった堂垂先生は、9年間の在学期間を経て工学部航空学科を卒業しました。その後は工場労働も経験し、31歳で千葉大学医学部に再入学します。医師としては回り道。ただ、“あんしん電話”などの取り組みを通じ、「医療や介護の専門職と地域住民が協働することで、地域が良くなることを実感しました」と話すその歩みは、地域再生を掲げる国の施策の先を進んでいます。



1日の外来患者数は約100名。また、在宅療養支援診療所として約50名の在宅患者を診ています。堂垂先生は院外活動にも精力的で、地域での多職種連携にも尽力してきました。